佐久市埋蔵文化財調査報告書　第51集

TERANAKA

上の平遺跡群

寺中遺跡

佐久市大字鳴瀬字寺中遺跡発掘調査報告書

NAKAYASIKI

平賀中屋敷遺跡群

中屋敷遺跡II

佐久市大字平賀字中屋敷遺跡発掘調査報告書

1997,3

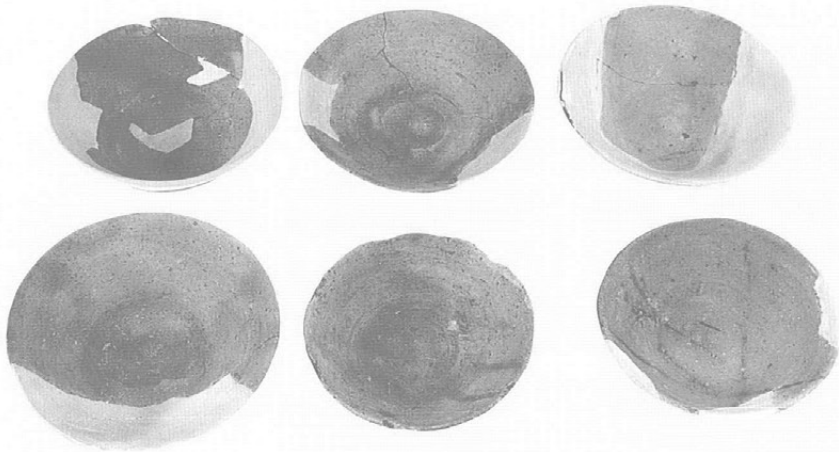
佐久建設事務所
佐久市教育委員会

上の平遺跡群

TERANAKA

寺　中　遺　跡

佐久市大字鳴瀬字寺中遺跡発掘調査報告書



例　言

1　本書は、平成７年度佐久建設事務所による道路改良工事にともなう、佐久市大字鳴瀬字寺中に所在する寺中遺跡の発掘調査報告書である。

2　事業主体者　　佐久建設事務所

3　調査主体者　　佐久市教育委員会　教育長

4　遺跡名及び発掘調査所在地籍

　　上の平遺跡群寺中遺跡（略称ＮＵＴ）

　　佐久市大字鳴瀬字寺中1057-1

5　調査期間　　平成７年11月16日～平成８年３月29日（現場・整理作業）

　　平成８年12月２日～平成９年３月31日（整理作業）

6　面　　積　　460㎡

7　本書の執筆・編集は上原が行った。

8　本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1　遺構・遺物の略称はＨ－竪穴住居址

2　挿図の縮尺は以下のとおりである。

　遺構　　竪穴住居址１／80

　遺物　　土師器・須恵器・石器１／３　遺構外遺物１／２

3　遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水糸高を標高とした。

4　土層・遺物の色調は、「新版標準土色帖」による。

5　スクリーントーンによる表示は以下のとおりである。

　須恵器実測図断面

目　次

例言

凡例

目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1

第１節　発掘調査の経緯と経過……1
第２節　調査体制……2

第II章　基本層序と遺構配置……3

第III章　遺構と遺物……5
第１節　竪穴住居址……5
第２節　遺構外出土遺物……9

第IV章　まとめ……10
写真図版

挿図・付表・写真目次

第１図　寺中遺跡位置図……1
第２図　寺中遺跡基本層序模式図……3
第３図　寺中遺跡グリット配置図……3
第４図　寺中遺跡位置図……4
第５図　１号住居址実測図……5
第６図　１号住居址出土遺物実測図……6
第７図　１号住居址出土遺物実測図……7
第８図　遺構外出土遺物実測図……9

第１表　１号住居址出土遺物観察表……8
第２表　遺構外出土遺物観察表……9

写１　寺中遺跡試掘状況……4
写２　寺中遺跡工事終了状況……4
写３　１号住居址全景……5
写４　１号住居址出土坏底部……10
写５　調査区より北を望む……10

写真図版

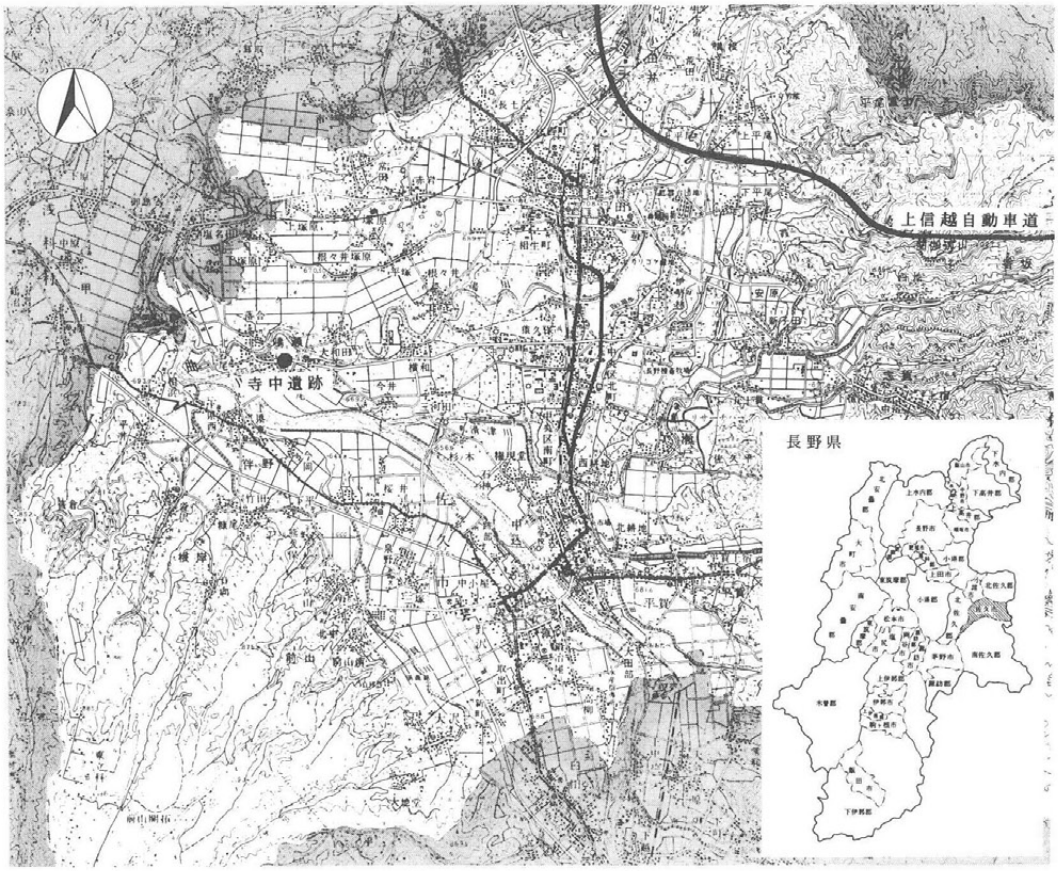
写６　１号住居址出土遺物
写７　１号住居址出土遺物
写８　遺構外出土遺物
写９　調査区全景（西から）
写10　調査区全景（東から）
写11　１号住居址遺物出土状況
写12　１号住居址遺物出土状況
写13　１号住居址遺物出土状況
写14　１号住居址遺物出土状況

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯と経過

上の平遺跡群寺中遺跡は、佐久市大字鳴瀬字寺中に所在し、標高649m付近を測る。調査地区は遺跡群のほぼ中央に位置し、北に湯川、南に千曲川が東西方向に流れる。遺跡の南東700mには、平成５年に株式会社創美による宅地造成にともない試掘調査が行われ、弥生時代から平安時代の住居址12軒が確認されている。また、調査区北側の畑からは、弥生時代から平安時代にいたる遺物が表面採集されている。

今回、佐久建設事務所による道路改良工事が行われることとなり、事前に遺構の有無を確認するため試掘調査を行った。その結果、平安時代と思われる住居址を確認した。このため、佐久建設事務所から委託を受けた佐久市教育委員会が主体となり、記録保存を目的として発掘調査を行う運びとなった。



第１図　寺中遺跡位置図

第2節　調査体制

平成7年度

教　育　長　依田 英夫

教 育 次 長　市川　源

埋蔵文化財課長　戸塚 満

管　理　係　田村 和広

埋蔵文化財係長　大塚 達夫

埋蔵文化財係　林 幸彦　三石 宗一　須藤 隆司　小林 眞寿
羽毛田 卓也　冨沢 一明　上原 学

調査担当者　上原 学

調　査　員　高地 正雄　小林 百合子　小山 澄江　高橋 敬子
花里 三佐子　比田井 久美子　細谷 秀子　武者 幸彦

平成8年度

教　育　長　依田 英夫

教 育 次 長　市川　源

埋蔵文化財課長　北沢 元平

管 理 係 長　棚沢 慶子

管　理　係　田村 和広

埋蔵文化財係長　大塚 達夫

埋蔵文化財係　林 幸彦　三石 宗一　須藤 隆司　小林 眞寿
羽毛田 卓也　冨沢 一明　上原 学

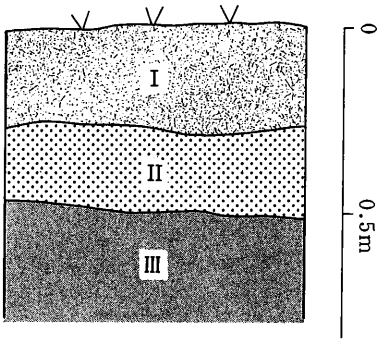
調査担当者　上原 学

調　査　員　高地 正雄　小林 百合子　高橋 敬子　花里 三佐子　花里 四之助
比田井 久美子　細谷 秀子　武者 幸彦

第II章　基本層序と遺構配置

第1節　基本層序

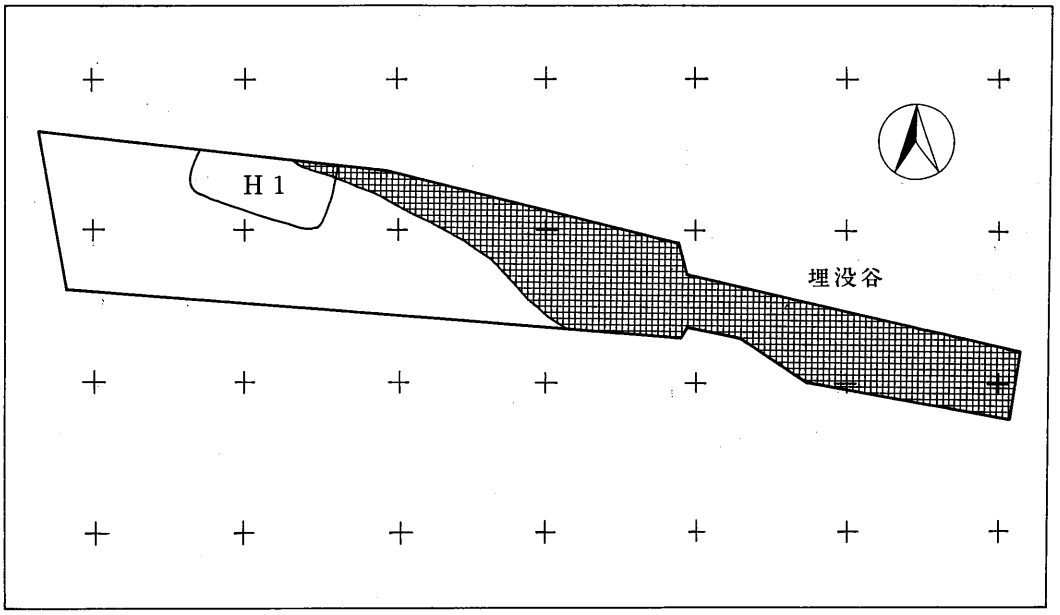
上の平遺跡群は、佐久市西部の標高650m前後の湯川と千曲川に挟まれた比較的平坦な台地上に位置する。今回調査を行った寺中遺跡はこの台地のやや湯川よりに位置する。標高は649mを測る。今回の調査で層序はIII層認められ、各層厚は調査区域内ではほぼ均一であった。I層は耕作土で厚さ28cmを測る。II層は暗褐色土のやや粘性を持った土質で5cm～15cm大の石を多く含む。厚さは24cmを測る。III層はローム土で、この上面が検出面となり、住居址1軒を確認した。



I. 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒 小石2～5cm大含む
II. 10YR3/4 暗褐色土 石多量に含む
III. 10YR5/6 黄褐色土 ローム質 地山

第2図　寺中遺跡基本層序模式図

第2節　遺構配置

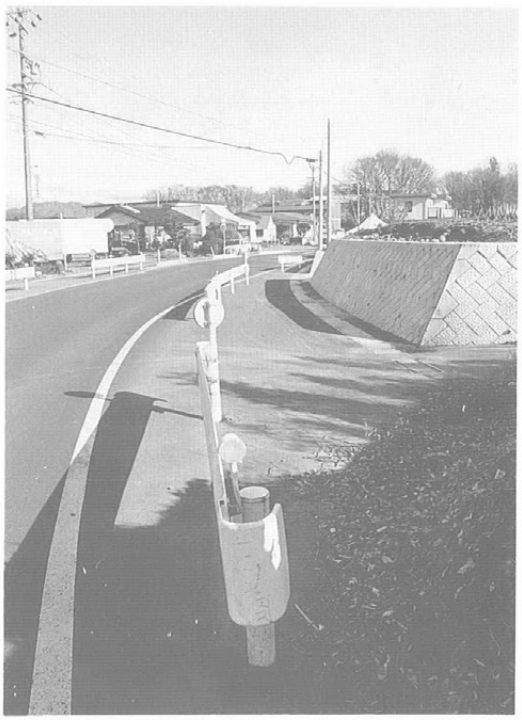


第3図　寺中遺跡グリット配置図

今回、道路改良工事に伴う発掘調査が行われ、調査区より平安時代の竪穴住居址１軒を確認し、調査を行った。

第４図　寺中遺跡位置図

写１　寺中遺跡試掘状況（東から）



写２　寺中遺跡工事終了状況（西から）

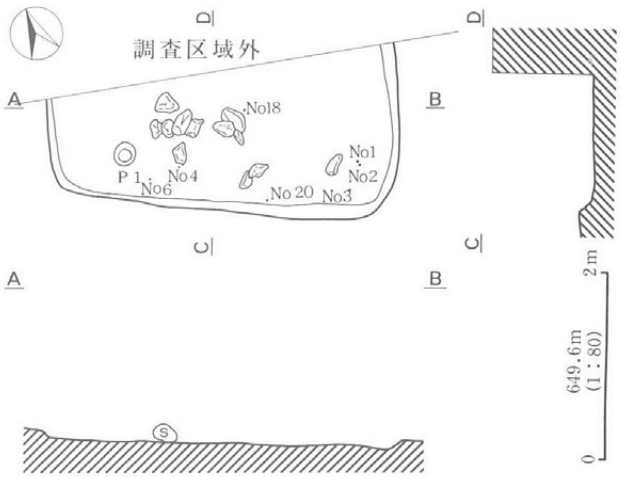
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

１号住居址

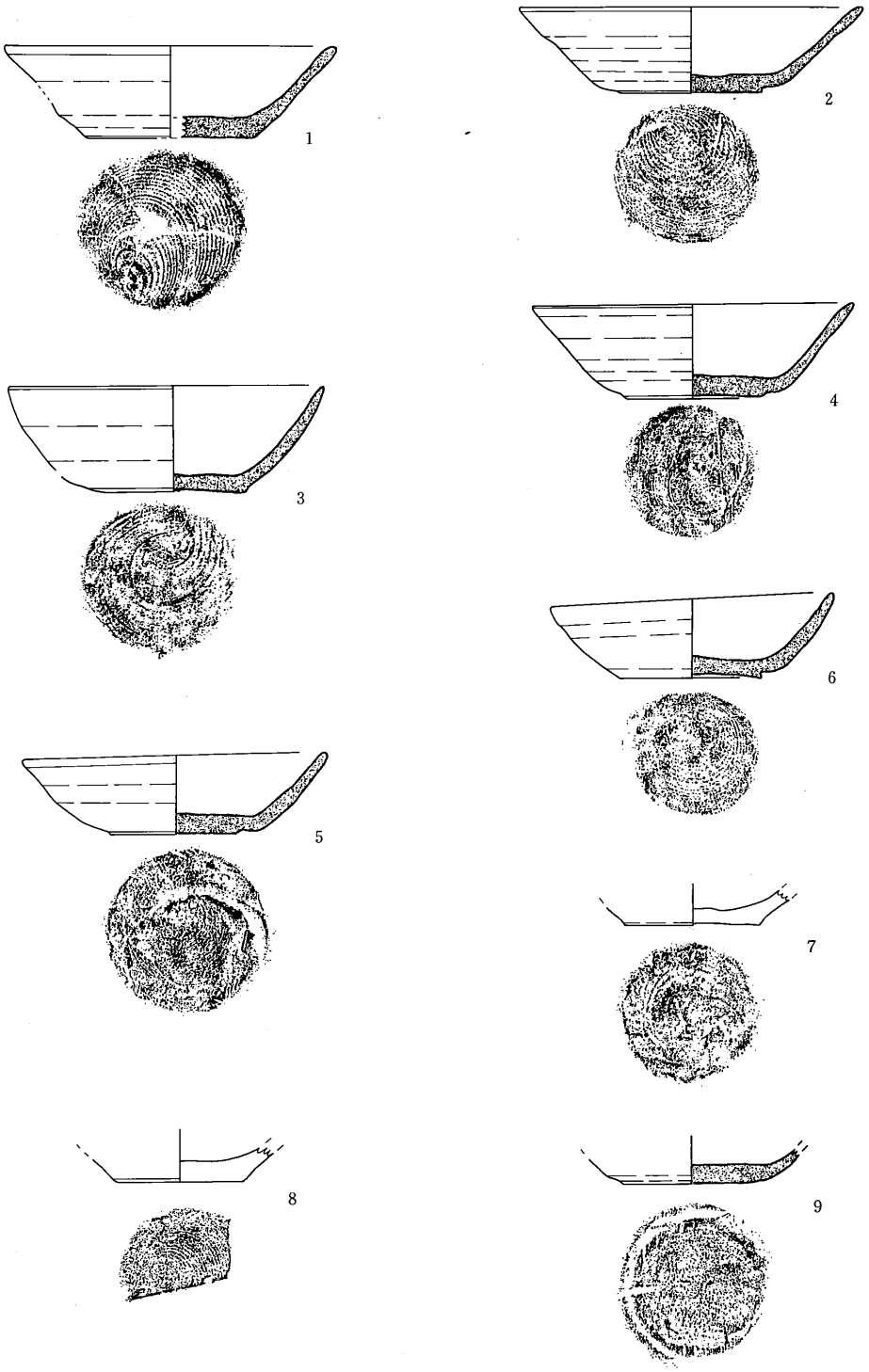
遺構は調査区のやや西よりに位置し、北側半分は調査区外となる。調査規模は最大値で、南北1.8m、東西3.8m、深さ12cmを測る。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。床面は貼りゆかされており、しまりがある。ピットは１個確認できた。

遺物は、須恵器を中心としたもので、坏13・大型の須恵器甕片３の他、土師器甕片・磨石１を出土した。

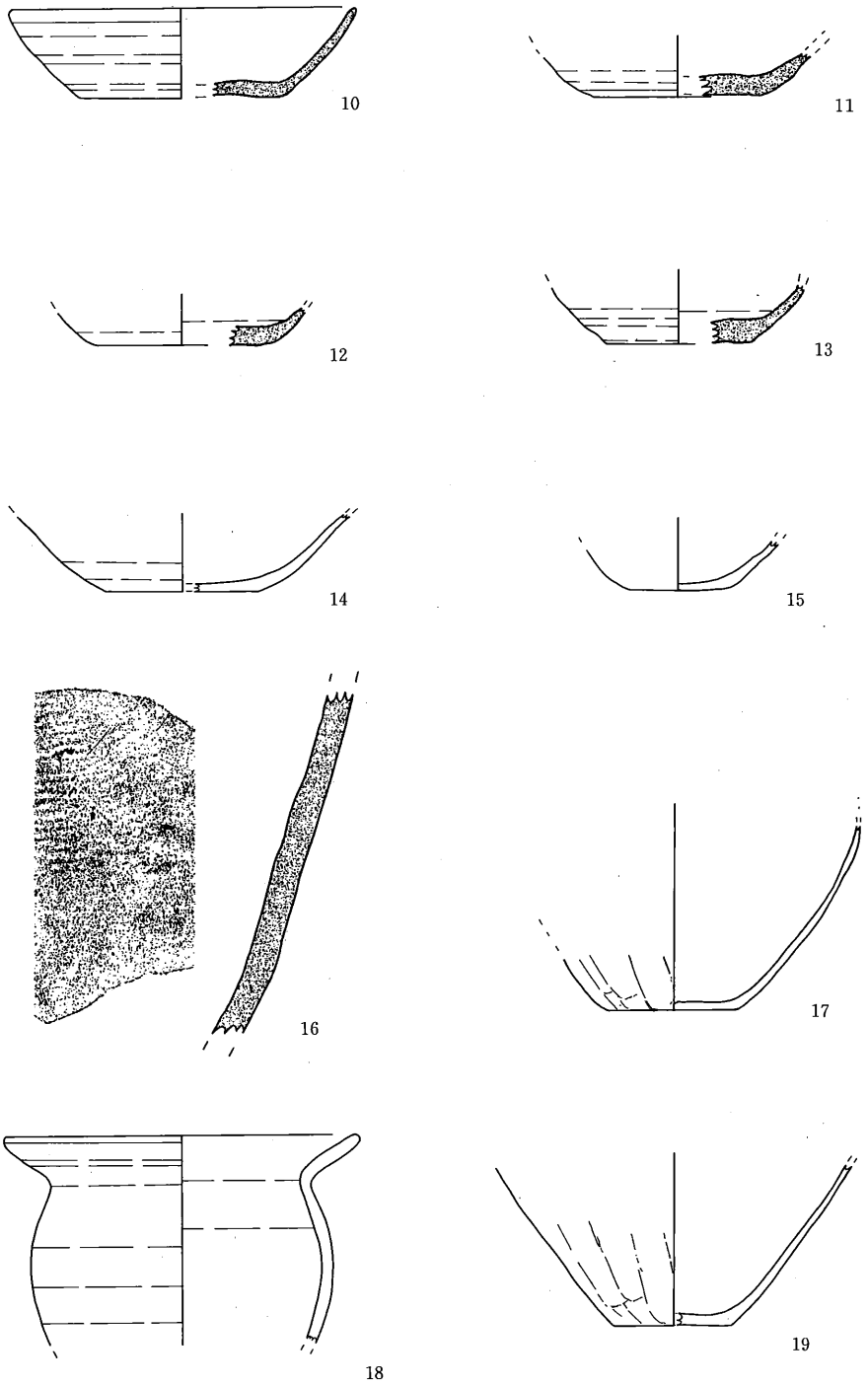


第５図　１号住居址実測図

写３　１号住居址全景



第６図　１号住居址出土遺物実測図



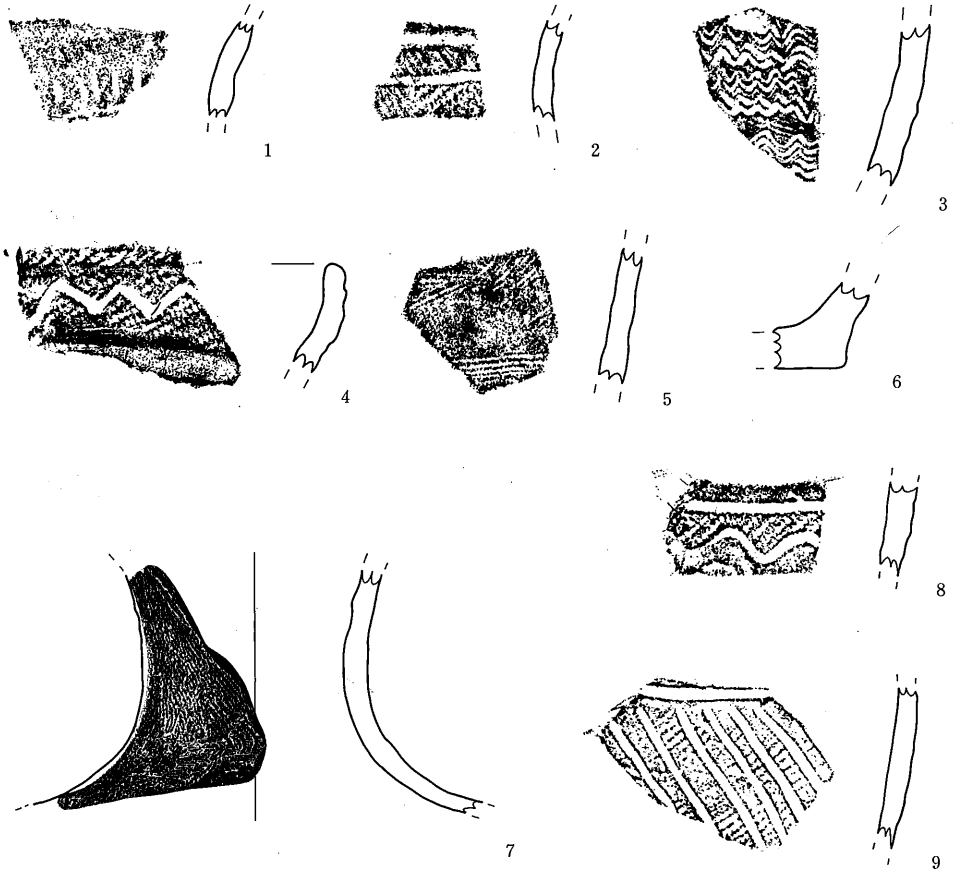
第７図　１号住居址出土遺物実測図

番号	器　種	器 形	口径	底径	器高	調　　整	備　　考
1	須恵器	坏	14.0	7.0	3.9	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率70%　　焼成　不良 色調　7.5YR6/1　灰色
2	須恵器	坏	14.5	6.0	3.6	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率70%　　焼成　良 色調　2.5Y7/2　灰黄色
3	須恵器	坏	14.6	5.8	4.5	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率55%　　焼成　良好 色調　2.5Y6/2　灰黄色
4	須恵器	坏	13.6	5.7	4.0	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率70%　　焼成　良好 色調　5Y7/3　浅黄色
5	須恵器	坏	13.0	5.4	3.5	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率90%　　焼成　良好 色調　7.5Y5/1　灰色
6	須恵器	坏	12.0	6.8	3.6	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率100%　　焼成　良好 色調　N8/1　白灰色
7	土師器	坏	－	5.9	－	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　黒色処理	残存率20%　　焼成　良好 色調　5YR6/6　橙色
8	土師器	坏	－	5.8	－	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　黒色処理	残存率20%　　焼成　良好 色調　5YR7/8　橙色
9	須恵器	坏	－	5.4	－	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率30%　　焼成　良 色調　7.5Y7/1　灰白色
10	須恵器	坏	－	－	－	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率20%　　焼成　良好 色調　2.5GY5/1　オリーブ灰色
11	須恵器	坏	－	7.4	－	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率15%　　焼成　良好 色調　10YR7/1　灰白色
12	須恵器	坏	－	6.6	－	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率15%　　焼成　良好 色調　10YR5/2　灰黄褐色
13	須恵器	坏	－	6.2	－	外面　ロクロ調整　回転糸切り 内面　－	残存率20%　　焼成　良好 色調　10YR7/1　灰白色
14	土師器	坏	－	4.6	－	外面　ロクロ調整　底部ヘラ削り 内面　黒色処理	残存率20%　　焼成　良好 色調　5YR6/8　橙色
15	土師器	甕	－	5.2	－	外面　底部　体部ヘラ削り 内面　－	残存率　底部及び体部の一部　焼成 色調　2.5YR5/6　明赤褐色　良
16	須恵器	甕	－	－	－	外面　タタキ　自然釉 内面　－	残存率　体部の一部　　焼成 色調　7.5Y3/1　オリーブ黒色　良
17	土師器	甕	14.4	－	－	外面　底部　体部ヘラ削り 内面　－	残存率　底部及び体部の一部　焼成 色調10YR3/3　黒褐色土　　良
18	土師器	甕	－	4.8	－	外面　ロクロ水引き 内面　口辺ロクロ水引き	残存率　口縁及び体部の一部　焼成 色調　2.5YR6/6　橙色　　良
19	土師器	甕	－	5.2	－	外面　底部　体部ヘラ削り 内面　－	残存率　底部・体部の一部　焼成 色調　5YR5/4　にぶい赤褐色　良

番号	器 種	石　材	径	厚　さ	重　量	備　　考
20	磨石	安山岩	9.4	2.2	324.2	よく磨られ、扁平な円形　一部欠損

第１表　１号住居址出土遺物観察表　　(単位 cm・g)

第2節　遺構外出土遺物



第8図　遺構外出土遺物実測図

番号	器　種	器形	部 位	厚さ	調　　整	焼成	焼　　成
1	弥生式土器	壺	頸　部	0.6	横方向の沈線　縦長の刺突文	良	10YR8/3　浅黄橙色
2	弥生式土器	壺	頸　部	0.5	横方向の沈線　縄文	良	10YR3/4　暗褐色
3	弥生式土器	壺	体　部	0.8	横方向・波状沈線	良	7.5YR5/6　明褐色
4	弥生式土器	壺	口　縁	0.6	鋸歯沈線文　斜め方向の縄文	良好	10YR3/1　黒褐色
5	弥生式土器	壺	体　部	0.6	横・斜め方向の櫛目文	良	10YR7/3　鈍い黄橙色
6	弥生式土器	壺	低　部	0.9	斜め方向の櫛目文	良	10YR8/4　浅黄橙色
7	弥生式土器	壺	頸　部	0.7	縦方向のミガキ　縄文	良	10YR7/2　鈍い黄橙色
8	弥生式土器	壺	口　辺	0.6	横方向の沈線・波状沈線　縄文	良好	10YR6/6　明黄褐色
9	弥生式土器	壺	体　部	0.6	横・斜め方向の沈線　縄文	良	10YR8/3　浅黄橙色

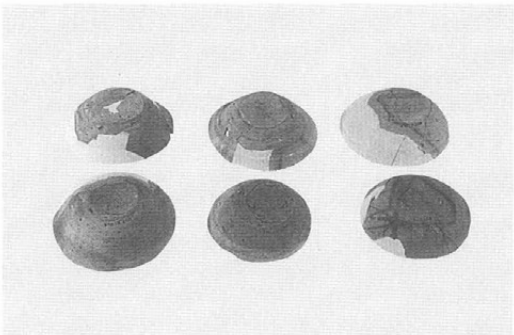
第2表　遺構外出土遺物観察表　　(単位 cm)

第IV章　ま と め

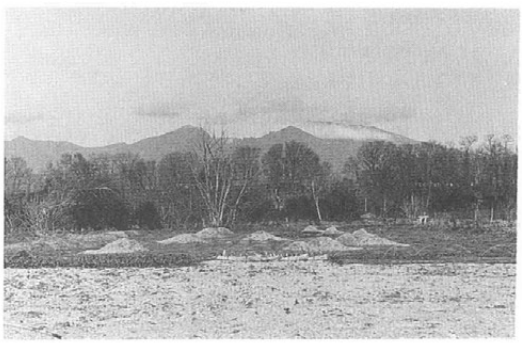
上の平遺跡群寺中遺跡の調査により平安時代の住居址１軒を確認した。調査は住居址全体の３分の１にとどまり、壁高も低く、カマドも確認できなかった。しかし、住居址内からは床の直上から、須恵器を中心に土師器・磨石等の遺物が出土した。須恵器は坏が中心で、器形の全体像を伺えるものとして図版No.１～No.６があげられる。坏には、底部回転糸切り後無調整の底部からやや内腕気味に立ち上がり、口縁部に至るタイプ（図版No.３・５・６）と、底部回転糸切り後無調整の底部から立ち上がり、体部中央付近で若干内側にへこんだ後、ほぼ直線的に口縁部に至る２つのタイプが認めらる。（図版No.１・２・４）また、こうした坏の中には底部と体部の間に僅かながら段を伴うものが見られ、坏の底部は段のないものに比べ低径はかなり小さくなる。（図版No.２・４・６）土器の胎土は小石を多く含み、粒子は粗い。このほか須恵器では表面に叩き痕を持つ甕片（図版No.16）が出土している。坏と同様に胎土は多くの小石を含み、粒子も粗い。

土師器は、甕が大半を占め底部（図版No.17･19）の径が4.5cm～5.5cmと小さく、体部がやや開き気味に立ち上がるタイプと、小型の轆轤甕（図版No.18）で、球形にちかい体部から「く」の字状に折れ、口縁部へ至る２タイプが認められた。このほか内面黒色処理を施した坏も数点認められた。（図版No.７・８・14）これら住居址内から出土の土器から察するに、上の平遺跡群寺中遺跡の住居址は、須恵器坏の形状・底部糸切り後未調整なこと、土師器の轆轤甕の存在などから９Ｃ後半から10Ｃ初頭のものと考えられる。

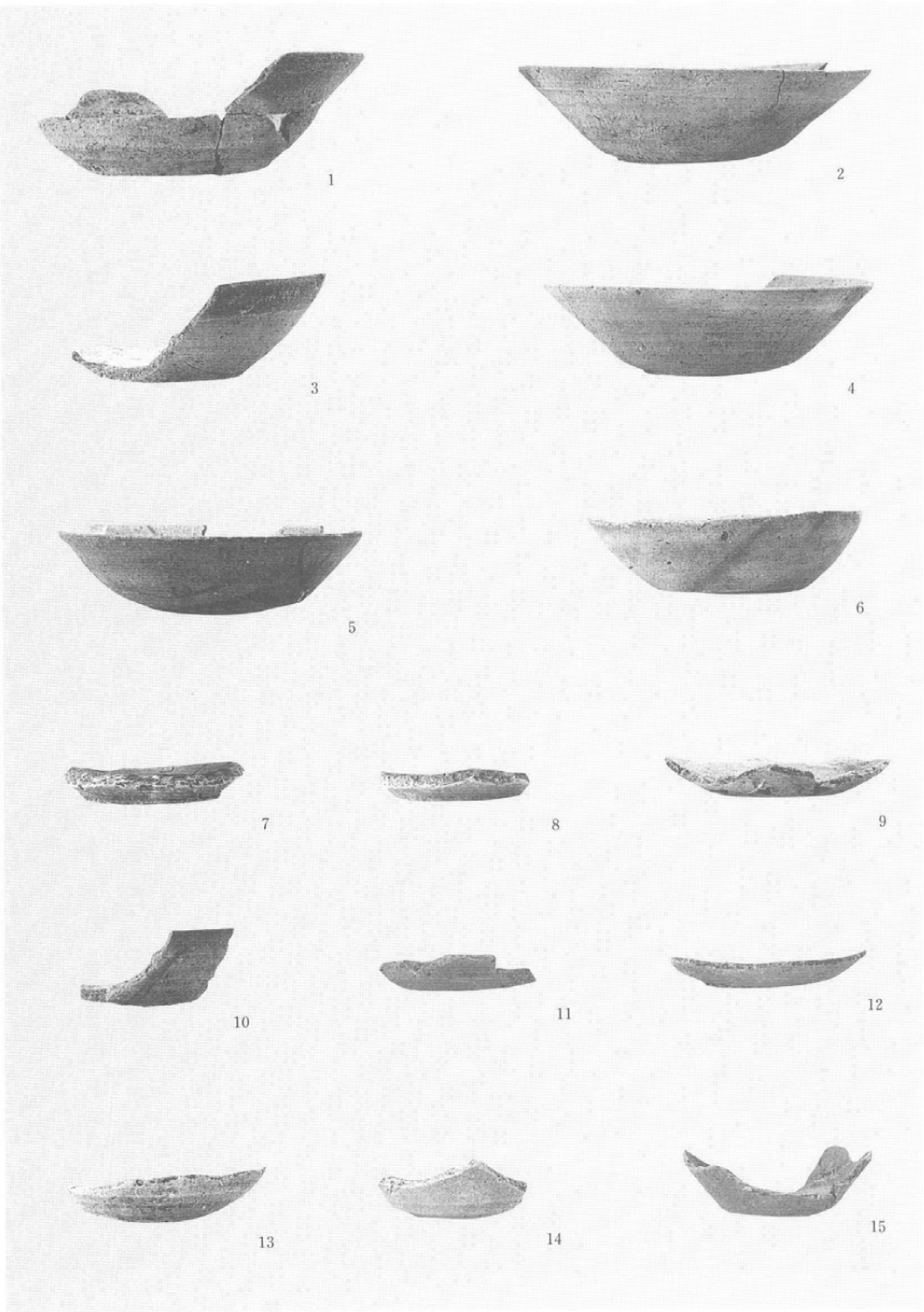
また、遺構検出段階に弥生時代中期後半に位置付けられる栗林式土器片等が出土している。調査面積が限られた狭い範囲であったこともあり、弥生時代から奈良時代に至る遺構の確認こそできなかったが、寺中遺跡の所在する湯川と千曲川に挟まれた台地上には、弥生時代から平安時代にわたり、人々の暮らしが営まれていた可能性も考えられないだろうか。今後、周辺地域のさらなる成果に期待するものである。



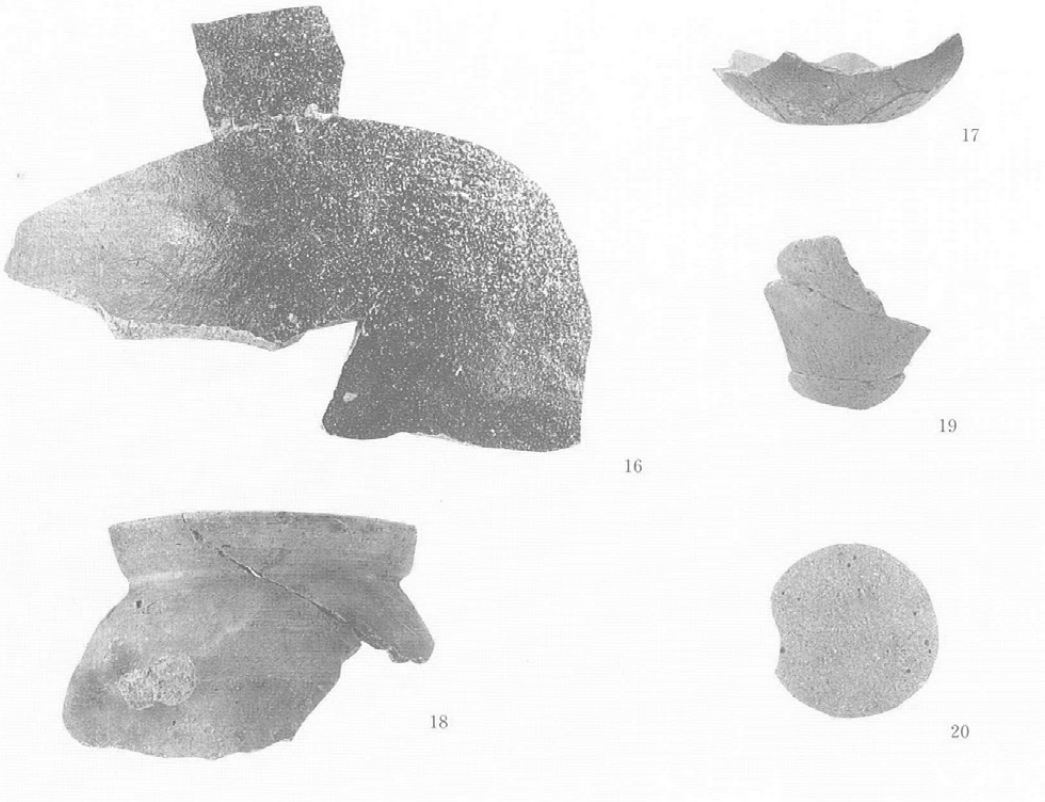
写４　１号住居址出土坏底部



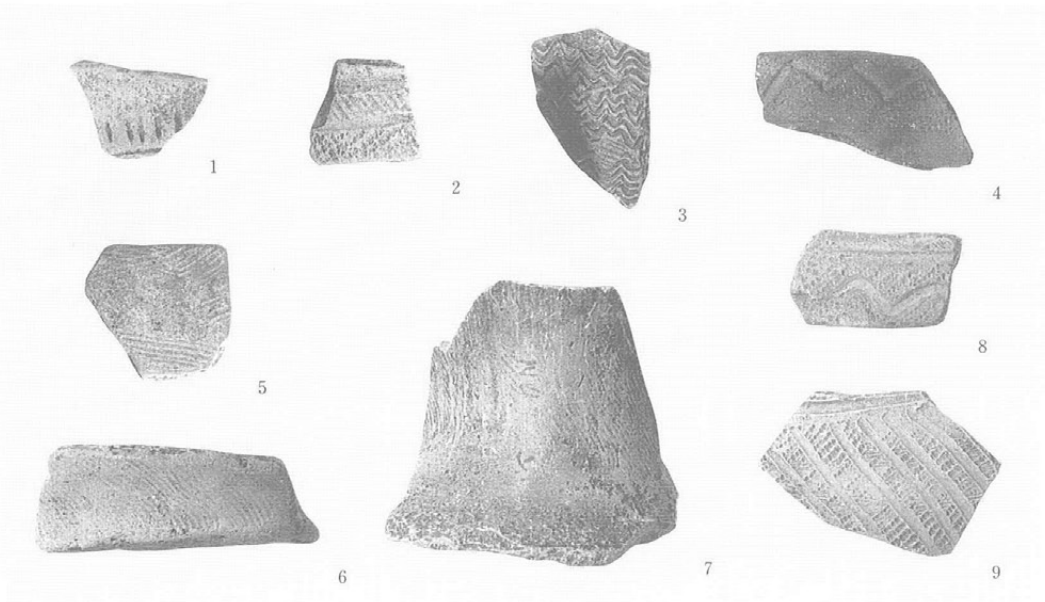
写５　調査区より北を望む



写6　1号住居址出土遺物



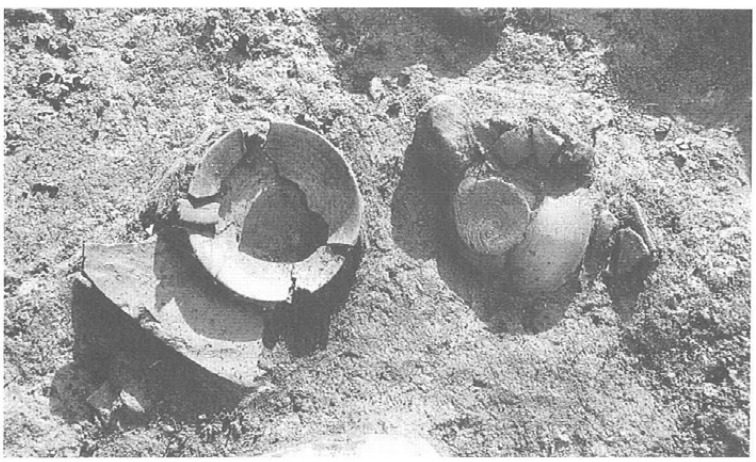
写７　１号住居址出土遺物



写８　遺構外出土遺物

写９　調査区全景（西から）

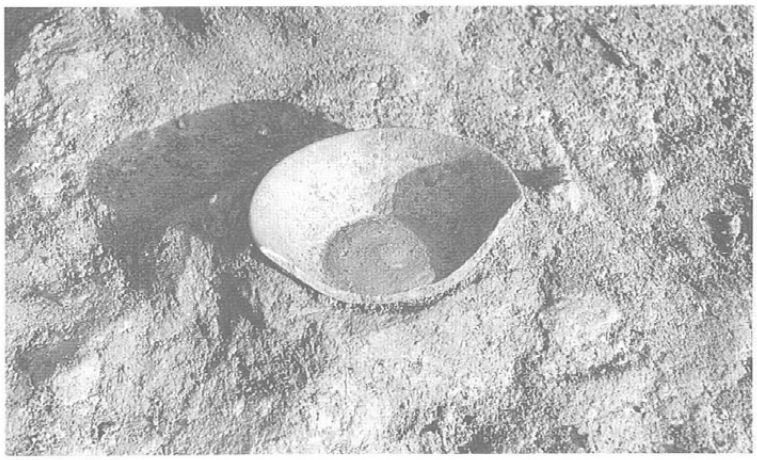
写10　調査区全景（東から）



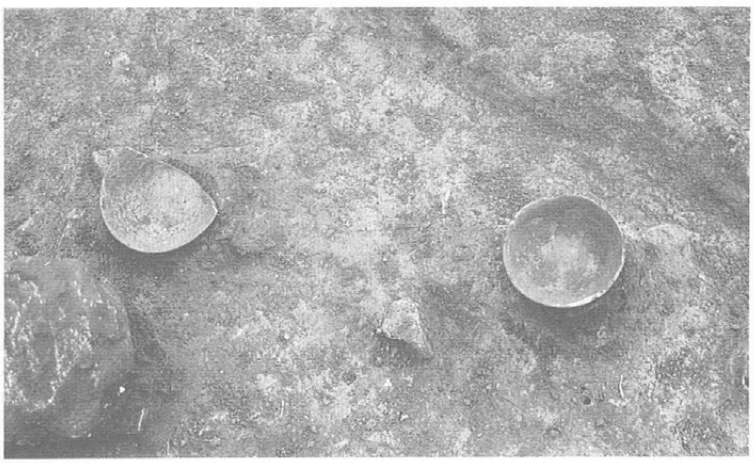
写11　１号住居址遺物出土状況（右No.１・左No.２）

図版四

写12　1号住居址遺物出土状況（No.4）



写13　1号住居址遺物出土状況（No.6）



写14　1号住居址遺物出土状況（右No.4・左No.6）

平賀中屋敷遺跡群

NAKA YA SHIKI

中屋敷遺跡 II

長野県佐久市大字平賀字中屋敷遺跡発掘調査報告書

例　言

1．本書は、長野県佐久建設事務所が行う佐久市北耕地における交通安全事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．調査委託者　　佐久建設事務所

3．調査受託者　　佐久市教育委員会

4．発掘調査所在地籍　　平賀中屋敷遺跡群
　　中屋敷遺跡II　（ＨＮＹII）
　　佐久市大字平賀　北耕地5365-2

5．調査期間及び面積　　発掘調査　平成７年９月12日～平成７年９月22日
　　整理調査　平成８年８月29日～平成９年３月31日
　　面　　積　59m²

6．本書の執筆・編集は、冨沢が行った。

7．出土遺物の青磁については森泉かよ子、その他については羽毛田卓也・小山岳夫の各氏に御教示いただいた。

8．本書及び中屋敷遺跡II出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1．挿図の縮尺は次のとおりである。
　遺構１／80　　カマド１／60　　土坑１／40　　遺物１／４

2．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

3．土層・遺物胎土の色調は、1988年版「新版　標準土色帖」に基づいた。

4．遺物挿図番号と遺物写真番号は一致する

5．挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを示す。

〈遺 構〉

地山断面　　かまど範囲・焼土範囲

〈遺 物〉

黒色処理　　施釉範囲

灰釉断面　　鉄器断面

目　次

例言・凡例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……19

第１節　調査の経緯と経過……19

第２節　調査の体制……20

第３節　調査日誌……20

第Ⅱ章　遺跡の環境……21

第１節　自然的環境……21

第２節　歴史的環境……21

第Ⅲ章　基本層序と遺構配置……24

第Ⅳ章　遺構と遺物……25

第１節　竪穴住居址……25

（１）１号住居址……25

（２）２号住居址……26

（３）３号住居址……27

第２節　溝状遺構……27

（１）１号溝状遺構……27

第３節　ピット……28

第Ⅴ章　調査のまとめ……29

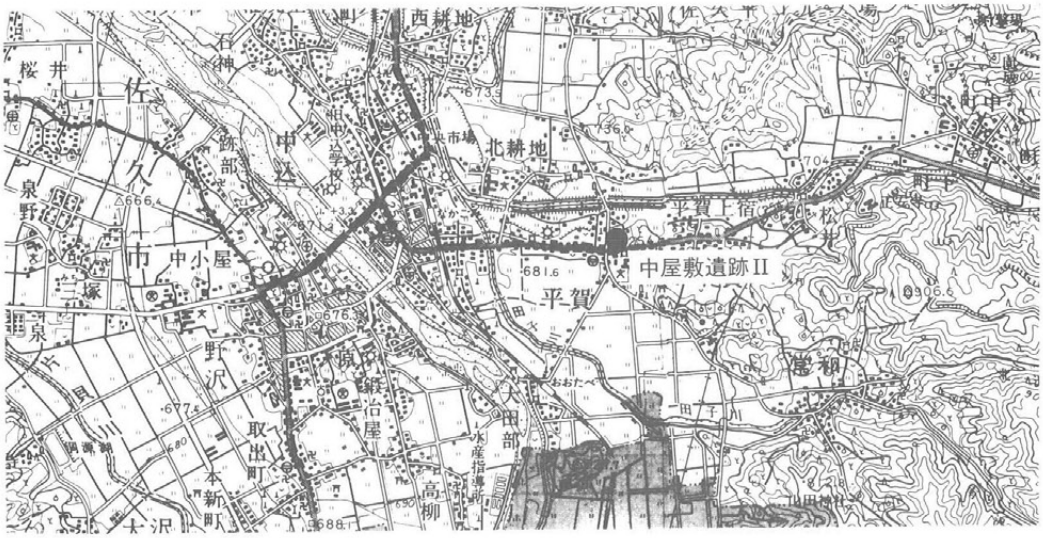
写真図版

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯と経過

中屋敷遺跡Ⅱが存在する中屋敷遺跡群は、佐久市大字平賀地籍に所在し、物見山（1375m）・熊倉峯（1234m）・兜岩山（1368m）に源をはっする滑津川の南側、標高688m内外を測る扇状地先端部に位置する。滑津川をはさみ北方約500mの自然堤防上には、古墳時代後期の大集落約300軒が調査された樋村遺跡が存在する。

今回、昨年に引き続き佐久建設事務所が実施する県道香坂中込線の交通安全事業にともない、幅２ｍの歩道を設置する事となった。その為、佐久市教育委員会において試掘調査を行い、その結果、対象地南側において住居址２軒の存在と土師器片が確認された。よって、佐久建設事務所と当教育委員会において協議を行い、記録保存を目的とする本調査が実施されるはこびとなった。



第１図　中屋敷遺跡Ⅱの位置図（１：50000）

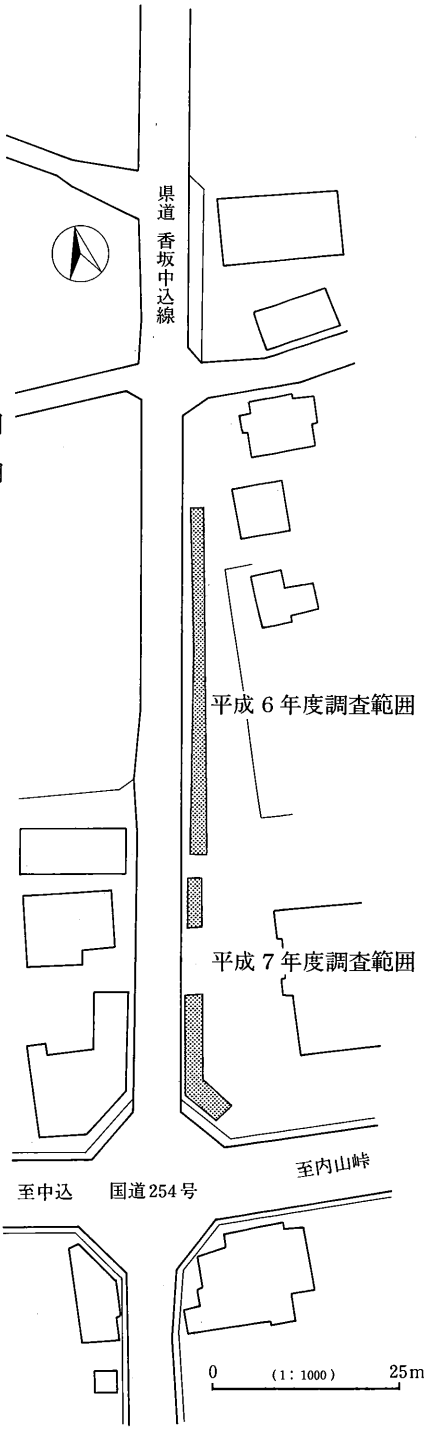
第２節　調査体制

佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教　育　長	依田　英夫
教育次長	市川　　源
埋蔵文化財課長	戸塚　　満（平成７年度）
	北沢　元平（平成８年度）
管理係長	棚沢　慶子（平成８年度）
管　理　係	田村　和広
埋蔵文化財係長	大塚　達夫
埋蔵文化財係	林　　幸彦　三石　宗一　須藤　隆司
	小林　眞寿　羽毛田卓也　冨沢　一明
	上原　　学
調査担当者	冨沢　一明
調査副主任	堺　益子
調　査　員	橋詰　勝子　橋詰　信子　橋詰けさよ
	堀篭　　因

第３節　調査日誌

1994年９月２日	試掘調査
９月12日	本調査開始　重機により表土剝ぎを行う
９月14日	遺構の検出・遺構の掘り下げを開始する
～21日	遺構実測・写真撮影等を行う
９月22日	機材を撤収し調査を終了する。
1994年12月５日	報告書作成作業開始
３月31日	報告書を刊行する。



第２図　中屋敷遺跡Ⅰ・Ⅱ調査範囲図

第II章　遺跡の環境

第1節　自然的環境

中屋敷遺跡が所在する佐久市平賀地籍は、巨視的に見ると佐久平の南東よりに位置し、八風山・物見山・荒船山などの山地が千曲川に迫った一支脈先端に位置する。現遺跡地形は、北に滑津川が西流し、南には田子川と千曲川が南流しており、西側に緩く傾斜する段丘状を呈している。この段丘は、河川によって形成された扇状地が再び滑津川の開析によって段丘化したものである。段丘中心には現在国道254線が通過しており、道路沿いには集落が散在し、その後背地には水田が広がっている。

第2節　歴史的環境

本遺跡が所在する平賀地籍及びその周辺の志賀・瀬戸・内山地区には、南面に開けた山腹、段丘上、低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡は未だ発見されていない。続く縄文時代の遺跡としては、平成2年度より2年間調査された寄山・勝負沢・中条峯遺跡（256・337）がある。本遺跡からは縄文前期から中期にかけての集落37軒や多数の土坑が調査され、縄文中期中葉から後葉を主体とする多量の土器が出土している。その他には調査された遺跡はないが、上宮前遺跡（444）からは縄文後期の土器が採集されている。

次に弥生時代は、樋村遺跡（344）で弥生中期から後期の住居址22軒と環濠と考えられる溝2本が調査されている。また、昭和57年度調査の上の台遺跡で後期の住居址2軒、昭和47年度調査の深堀遺跡（255）では中期の住居址2軒が調査されている。このほか新町遺跡（428）、久彌添遺跡（434）など千曲川・田子川・滑津川により形成された自然堤防上に弥生時代の遺跡が点在する。

古墳時代の代表的な遺跡としては樋村遺跡（344）がある。当遺跡は縄文時代から平安時代に及ぶ複合遺跡で、特に古墳時代後期の住居址273軒が調査されている。当該期の住居址は三時期に区分されると報告されている。中でも7世紀代に比定されるIII期には遺跡内の住居址の規模格差が広がる時期にあたり、古墳時代集落址研究において示唆にとむ結果が得られている。また、内山地区の山腹は佐久平において古墳群が最も密集する地域のひとつで、長峯古墳群（368）・寄山古墳（262）・後家山古墳（353）などが調査されている。いずれも7，8世紀代の後期古墳群として位置づけられている。

奈良・平安時代にはいると周辺の遺跡数は増大するが、集落的には小規模なものが多くなる。樋村遺跡（344）においても14軒が検出されたにとどまっている。

鎌倉時代以降になると平賀氏の活躍が始まる。平賀氏は鎌倉幕府の御家人として近習番等をつとめ、佐久郡平賀郷はその本貫地とされ文安３年（1446）大井氏に滅ぼされるまで当地を所領とした。しかし、現在字城平に残る平賀城跡（447）との直接の結びつけは疑問視する説もあり、今後の文献史料及び発掘調査の成果研究に期待がかけられている。

第３図　周辺遺跡の分布図（１：25000）

第１表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	所　在　地	立　地	縄	弥	古	歴	中	備　　考
255	深堀遺跡群	瀬戸字深堀　他	台地先端	○	○	○	○	○	昭和47年調査
256	寄山遺跡群	瀬戸字菖蒲澤　他	丘　　陵	○			○	○	平成２・３年度調査
257	中条峯城跡	瀬戸字中条峯	〃					○	
258	中条古墳群	〃	〃			○			
262	寄山古墳	志賀字寄山5167-1	〃			○			平成３年度調査
333	東千石平遺跡群	瀬戸字東千石平	低　　地			○	○	○	
336	中反　〃	瀬戸字中反・中屋敷	〃				○		
337	中条峯遺跡	瀬戸字中条峯・中条平	丘　　陵	○		○	○		
340	宮田　〃	瀬戸字宮田	〃	○		○	○		
343	開戸田　〃	平賀字開戸田・後家	丘陵先端				○		
344	樋村遺跡群	平賀字樋村・上吉田・山崎	段　　丘		○	○	○		昭和57・58年度調査
353	後家山古墳	平賀字後家山3000	〃			○			昭和49年度調査
354	東久保古墳群	平賀字東久保・開戸田	丘陵先端			○			
365	東姥石　〃	平賀字東姥石	山　　腹			○			
366	月崎　〃	平賀字月崎	〃			○			
367	西和田　〃	内山字西和田　他	〃			○			
368	長峯　〃	内山字長峯	〃			○			昭和62年度調査
370	観音堂古墳	内山字坪ノ内6744	丘陵先端			○			
428	新町遺跡	中込字新町	低　　地				○		
431	荒家　〃	平賀字荒家	段　　丘			○	○		
432	平賀中屋敷遺跡群	平賀中屋敷・下屋敷・上屋敷	〃		○	○	○		
433	中堰遺跡	平賀字中堰	低　　地				○		
434	久彌添　〃	太田部字久彌添　他	〃			○	○		
435	下屋敷古墳	平賀字下屋敷5392	段　　丘			○			
436	上屋敷　〃	平賀字上屋敷5221	〃			○			
437	北谷津遺跡	平賀字北谷津・南谷津	〃				○		
438	滝　〃	平賀字滝	丘　　陵	○		○	○	○	
443	城平遺跡群	平賀字城平・筒井	山　　腹	○	○	○	○	○	
444	上宮前　〃	常和字上宮前　他	山　　地	○	○	○	○		
447	平賀城跡	平賀字城平　他	山　　頂					○	
453	萩元古墳	平賀字萩本4551	丘　　陵			○			

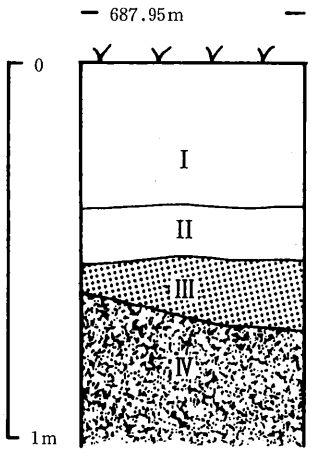
第Ⅲ章　基本層序と遺構配置

基本層序

本遺跡における基本層序は、第４図に示したようにおおむね４層に分かれる。第Ⅰ層は耕作土でしまりが弱く径約１cmほどの小石を多く含む。第Ⅱ層は黒褐色のややしまり粘性のある層で、層中より少量の土器が検出されている。第Ⅲ層は本遺跡の遺構確認面として捉えられた層で黄褐色のシルト化した土層である。しかし、本層は調査区全体に均一に堆積しておらず、３号住居址付近では、非常に薄い堆積となっていた。第Ⅳ層はこぶし大の河原石を含む堆積層で下層にすすむにしたがい砂層も部分的に含む。

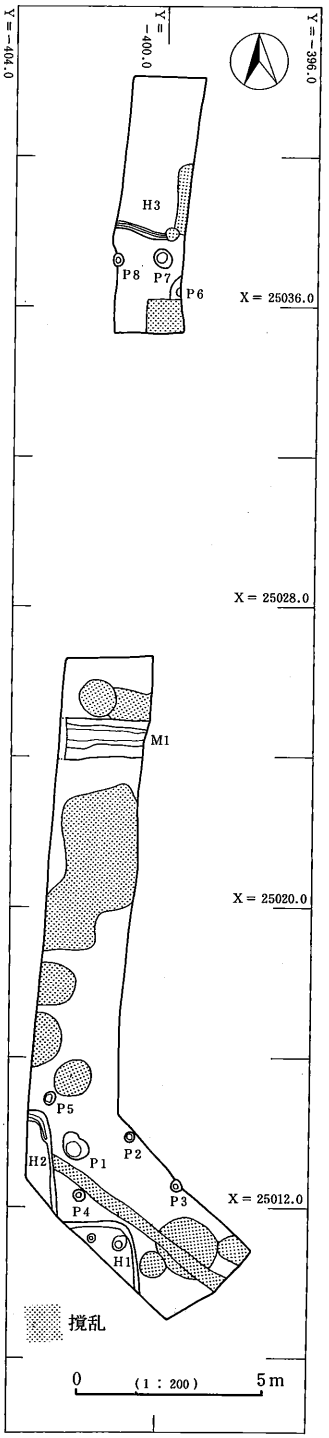
遺構配置

今回の調査範囲は、ほぼ平坦な地形で、北側に位置する中屋敷遺跡Ⅰ区において北側に緩やかに傾斜する。遺構配置は国道254号線付近の台地中央部において竪穴住居址等の遺構の広りが予想されたが、調査区が狭い範囲であり、既存建物などの基礎による破壊が著しく詳細は不明であった。



第Ⅰ層　褐灰色土(耕作土)(10YR5/1)
第Ⅱ層　黒褐色土(10YR3/1)
第Ⅲ層　黄褐色土(10YR5/8)遺構確認面
第Ⅳ層　暗褐色土(10YR3/3)

第４図　基本層序模式図



第５図　中屋敷遺跡Ⅱ全体図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

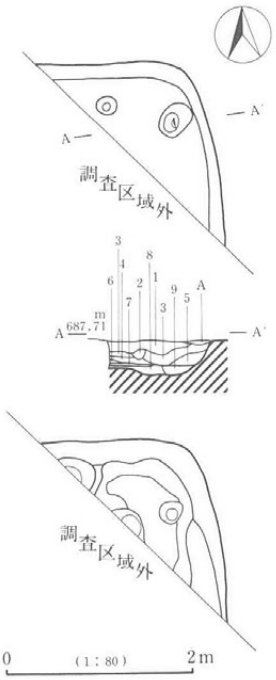
１）１号住居址　（第６・７図）

１号住居址全景（北より）

１号住居址掘り方全景（北より）

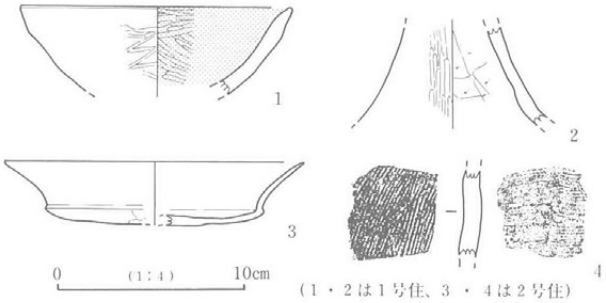
本址は調査区南端に住居址北東コーナー部のみ検出された。規模は検出部分で東壁２m・西壁1.5m・壁高0.25m（床面まで）を測る。床はやや軟質の黒褐色土が張られており、厚さは0.11mを測る。コーナー部のピットは径0.4m・深さ0.15mを測る。

本址からの出土遺物は覆土・床面から、土師器坏・甕片がある。図示したものは１が土師器坏で内面黒色処理が施されている。焼成は良好で、調整は外面がヘラ削りの後、体部は



A．褐灰色土（10YR6/1）　しまりあり・粘性なし。
1．褐灰色土（10YR4/1）　しまり・粘性弱い。砂層。
2．褐灰色土（10YR4/1）　１層に似るが、やや黒味が強い。
3．褐色土　（10YR4/4）　しまり・粘性あり。ローム粒子を多量含む。
4．黒色土　（10YR2/1）　粘性あり。ローム粒子を微量含む。
5．黒褐色土（10YR3/1）　しまり・粘性あり。川砂利を含む。
6．暗褐色土（10YR3/4）　しまり・粘性やや弱い。炭化物・焼土粒子を含む。
7．黒色土　（10YR2/1）（貼り床）　しまり強く・粘性弱い。踏み固まった床でブロック状になっている。
8．黒褐色土（10YR3/1）（貼り床）　しまり・粘性ややあり。ローム粒子層状になっている。
9．黒褐色土（10YR3/1）（貼り床）　しまり・粘性弱い。ロームブロックを含む。

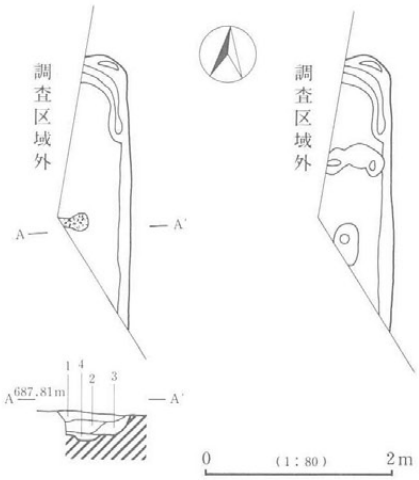
第６図　　１号住居址全体図



第７図　　１号・２号住居址出土遺物

ミガキ、口縁部はナデが施されている。２は土師器高坏の脚部であり、焼成は良好で、調整は外面が縦方向のミガキ、内面はナデが施されており、また黒色処理の様な煤状のものが付着している。

２）２号住居址　（第７・８図）

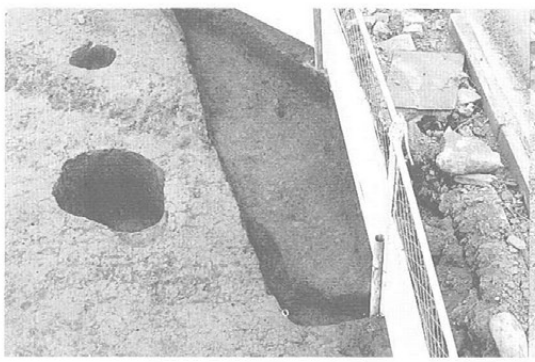


第８図　　２号住居址及び掘り方全体図

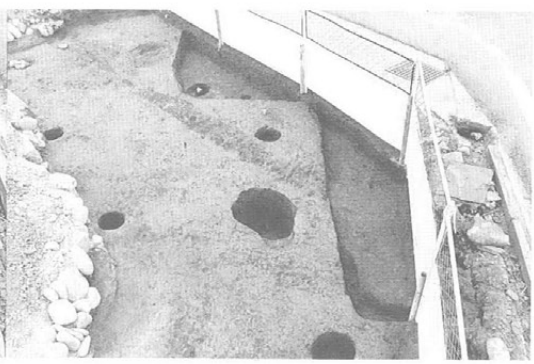
1．褐灰色土（10YR4/1）
　しまりあり・粘性弱い。
2．褐色土（10YR4/6）
　しまりあり・粘性弱い。ロームブロック黒色土の混合土。
3．黒色土（10YR2/1）
　しまり・粘性あり。炭化物を少量含む。
4．黄褐色土（10YR5/8）
　しまり・粘性あり。ロームブロック・焼土粒子を含む。（貼り床）

本址は調査区南端に検出された。１号住居址と重複関係にあるが、重複部が調査区外となる為、新旧関係は不明である。規模は検出部で東壁2.5m・壁高0.19mを測る。住居址北東コーナー部では壁溝が、また東壁脇には薄い焼土が検出された。床はやや軟質の黄褐色土が張られていた。

本址からの出土遺物は土師器坏・甕片があり、図示したものは３が土師器坏で非常に焼成が良好である。４は土師器甕の胴部破片で外面はタタキの様な荒い刷毛目を施している。

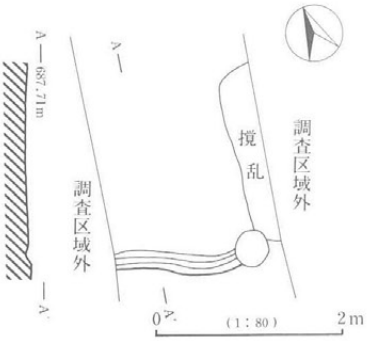


２号住居址全景（北より）

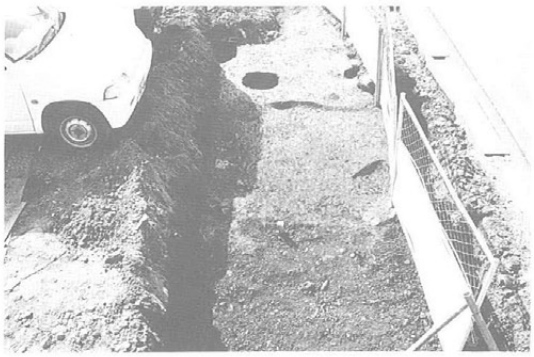


１・２号住居址全景（北より）

3） 3号住居址 （第9図）



第9図　3号住居址全体図

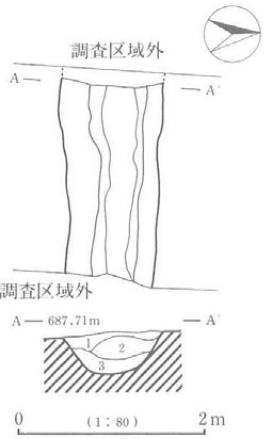


3号住居址全景（北より）

本址は調査区北側で確認された。検出状況は住居址南壁溝と考えられる溝と、溝より北側に広がる平坦面がやや硬化しており敲き床の様な状態であった。よって、遺構の全容は不明であるが今回は住居址として報告する。規模は検出部で南壁1.4mを測る。本址からの出土遺物はなかった。

第2節　　溝状遺構

1） 1号溝状遺構 （第10・12図）



1．褐灰色土（10YR4/1）
しまり・粘性弱い。ローム粒子微量含む。

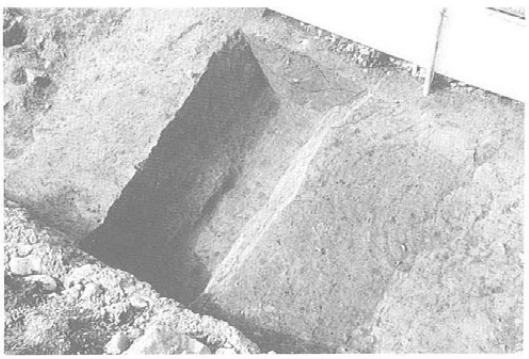
2．黒褐色土（10YR3/1）
しまり・粘性ややあり。ローム粒子を含む。

3．褐色土（10YR4/6）
しまり・粘性あり。下層にロームブロックを含む。

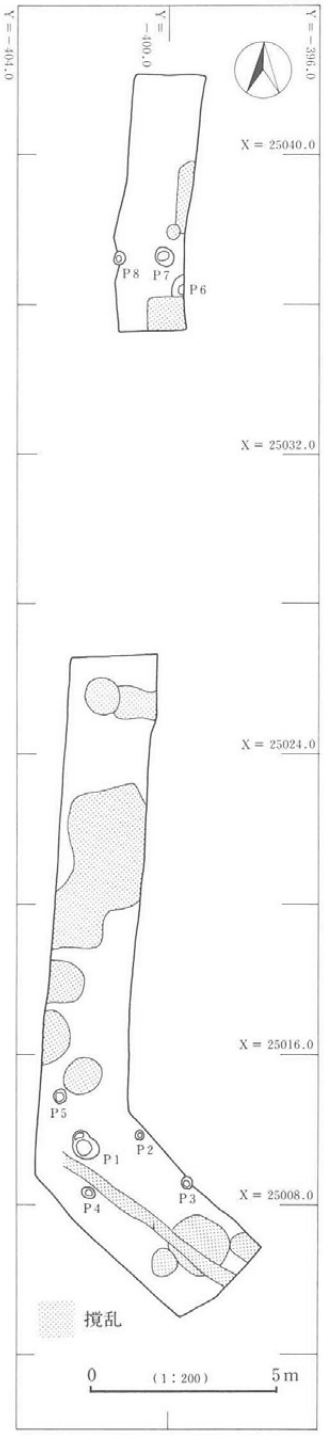
第10図　1号溝状遺構全体図

本址は調査区ほぼ中央で検出された。検出状況は東西に直線状にのび、形態は逆台形状を呈する。溝底面はほぼ平坦で流水或いは歩行による踏み固めなどの状況は確認されなかった。溝の深さは最深部で0.43mを測る。

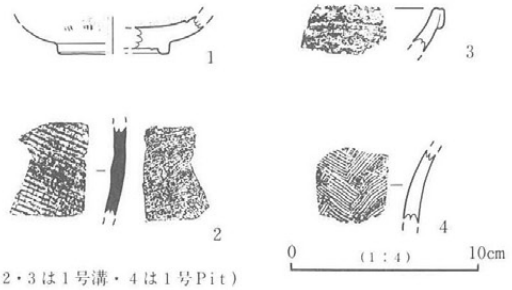
本址からの出土遺物は土師器坏・甕片、須恵器甕片、土師質土器坏片、青磁碗片、弥生後期(箱清水期)壺・甕片などがある。



1号溝状遺構全景（東より）



第11図　Pit配置全体図



(1・2・3は1号溝・4は1号Pit)

第12図　1号溝状遺構・1号Pit出土遺物

1は洞安窯系の青磁碗で、底部から体部1/4が残存する。釉はやや緑がかった発色で、調整は底部付近にケズリが施されている。2は須恵器甕の胴部破片で、調整は外面が平行タタキが施されている。3は土師器甑の口縁部と考えられ、口唇部が折り返されている。

第3節　Pit遺構　(第11・12図)

今回の調査範囲からは計8個のPitが検出された。いずれも単独の検出である。

出土遺物は弥生後期の壺・甕片、古墳後期の甕片などがあるがいずれも小片で遺構の所産時期特定には慎重となるものであった。

遺跡全景（北より）

第Ⅴ章　調査のまとめ

今回の調査は平成６年度に行われた中屋敷遺跡の継続部分であり、前回の調査区を幅２ｍ長さ33ｍ南へ延長した部分である。前回と違い今回の調査範囲は既存の建物があった場所であり建物部分の基礎による遺構確認面の破壊が激しく、また狭い範囲の調査であった為、確認された遺構も竪穴住居址３軒(古墳時代後期２軒,不明１軒)・溝状遺構１本・Pit８カ所であった。よって前回の調査分も含めると竪穴住居址７軒・土坑３基・溝状遺構１本・Pit８カ所となる。ここでは前回の調査部分も含め前回報告分と重複する部分もあるが事実確認を列挙してまとめとしたい。

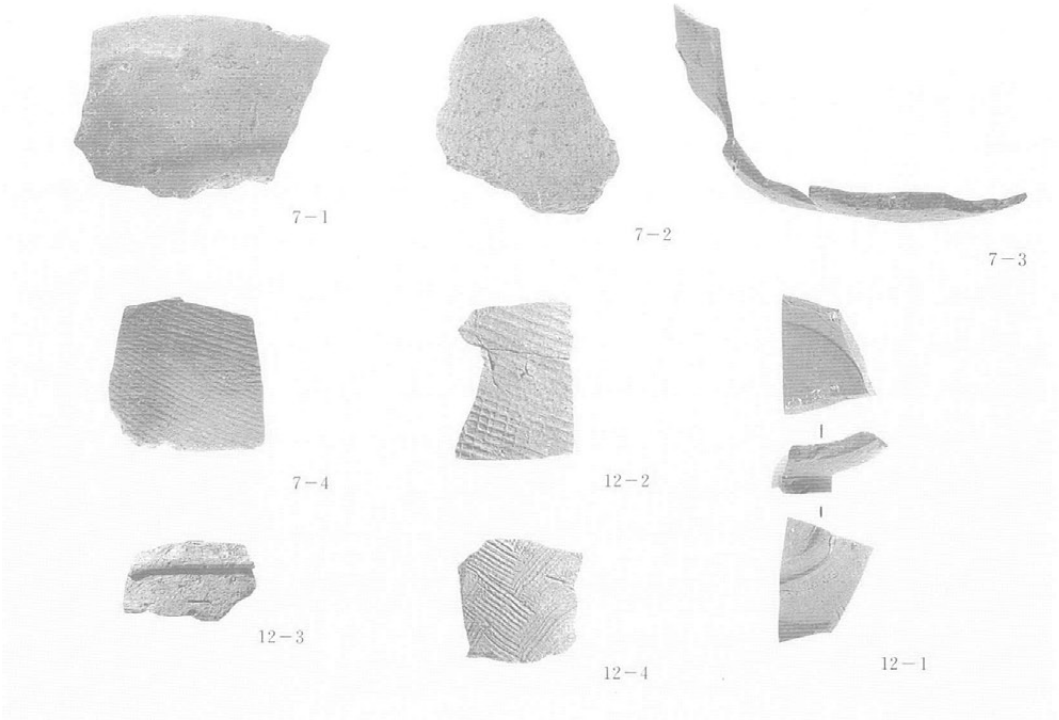
①佐久平において検出例の少ない10世紀後半以降の集落址の一部が確認された。

②平賀中屋敷周辺に存在するであろう弥生時代中期の集落址が今回の調査範囲では検出されず集落址範囲がある程度しぼられる。

③滑津川北側に広がる古墳時代後期の大集落址である樋村遺跡と同時期と考えられる住居址が検出され、滑津川をはさみ対岸にも同時期の集落が形成されていた可能性が見いだせる。

④中世遺物(青磁碗)が出土し、平賀地籍で中世遺構が存在することがあきらかとなった。

工事完成風景（南より）



中屋敷遺跡Ⅱ出土遺物

中屋敷遺跡Ⅱ調査風景

佐久市埋蔵文化財調査報告書

第１集　『金井城跡』
第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第３集　『石附窯址群III』
第４集　『大ふけ遺跡』
第５集　『立科Ｆ遺跡』
第６集　『上曽根遺跡』
第７集　『三貫畑遺跡』
第８集　『瀧の下遺跡』
第９集　『国道141号線関係遺跡』
第10集　『聖原遺跡II』
第11集　『赤座垣外遺跡』
第12集　『若宮遺跡II』
第13集　『上高山遺跡』
第14集　『栗毛坂遺跡』
第15集　『野馬久保遺跡』
第16集　『石並城跡』
第17集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
（１月～３月）
第18集　『西曽根遺跡』
第19集　『上芝宮遺跡』
第20集　『下聖端遺跡III』
第21集　『金井城跡II』
第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
第24集　『上聖端遺跡』
第25集　『上久保田向IV』
第26集　『藤塚古墳群・藤塚II』
第27集　『上久保田向III』
第28集　『曽根新城遺跡Ｖ』
第29集　『山法師Ｂ，筒村Ａ・Ｂ遺跡』
第30集　『市内遺跡発掘調査報告書 1992』
第31集　『山法師遺跡Ａ』
第32集　『東ノ割遺跡』
第33集　『聖原遺跡VII』
『下曽根遺跡Ｉ』
『前藤部遺跡２』
第34集　『西一本柳遺跡Ｉ』
第35集　『市内遺跡発掘調査報告書1993』
第36集　『蛇塚ＢIII』
第37集　『西一本柳II』
第38集　『南下中原遺跡II』
第39集　『平賀中屋敷遺跡』
第40集　『寺畑遺跡』
第41集　『曽根新城Ｉ・II・III・IV・VI
上久保田向Ｉ・II・Ｖ・VI・VII
西曽根遺跡II・III』
第42集　『寄山』
第43集　『権現平遺跡・池端遺跡』
第44集　『寺添遺跡』
第45集　『市内遺跡発掘調査報告書1994』
第46集　『濁り遺跡』
第47集　『上芝宮遺跡Ｖ』
第48集　『池端城跡』
第49集　『根々井芝宮遺跡』
第50集　『藤塚遺跡III』

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第51集
寺中遺跡・中屋敷遺跡II
長野県佐久市大字鳴瀬字寺中遺跡発掘調査報告書
長野県佐久市大字平賀字中屋敷遺跡発掘調査報告書
1997年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒384-01　長野県佐久市大字中込3056
埋蔵文化財課
〒385　長野県佐久市大字志賀5953
Tel　0267-68-7321
印　刷　所　株式会社　櫟〈いちい〉